

38歳まで専業主婦だった船曳鴻紅氏。インテリア・マート「東京デザインセンター」を通じて、デザイン界の内外に橋を架ける彼女の活動を紹介する。

人の本質は知力にある

大学は美大に進みたいという思いがありながら、悩んでいた「家」の問題に

取り組もうと社会学を目指し総合大學に進みました。しかし進学後も美術・工芸への関心は消えず、同級の橋本治氏に誘われて、美術部の中からデザイン部を創部したりしていました。

り、全共闘の一員となります。橋本氏は全共闘には加わりませんでしたが(彼こそ真正なるマージナル・マンでした)「東大東大どこへ行く」の駒場祭ボスターで、イラストレーターの道へと進みます。私は留年しながらかろうじて社会学部を卒業した後、既成のジャーナリズムに就職する気にもならず、劇作家のカバニ持ちのフリーターをしていました。

そして、26歳の時にやはり同級生だつた船曳建夫と結婚します。当時彼は大学院生で、私はベルギーのカーベットやデンマークのランプなどを扱う、とても小規模なインテリアの輸入商社に勤め始めていました。船が東京港に到

初めての会社勤めで先輩に教わることなく何でもやらされたこと、そしてメラネシアで、文明からはるか遠く離れても知的に優れた人々に出会えたことは、今の私の基軸となる、とても価値のある体験となっています。

## 東京デザインセンターの実現

私は、東京デザインセンターを実現させるにあたり二人のメンターがいました。一人は、京橋のファブリックスブランド、トミタの専務をされていた富田教子さんです。夫の留学先の英国では家事育児に縛られながらも、インテリアデザインに目を開かされました。カーテン生地を探しにトミタのショウルームを訪ねたのがきっかけで、英国で魅入つてしまつたインテリアについて語りなす口説を受けました。

ふなびき こうこ プロフィール	
略歴	
1947	埼玉県川越市に生まれ、小学校5年時に東京に転居
1966	私立東洋英和女学院高等部卒業
1972	東京大学文学部社会学科卒業
1973-1988	船曳建夫(現東京大学名誉教授)と結婚 二男二女の母となり専業主婦を続ける
1989-1993	株式会社東京デザインセンター 取締役副社長
1991-1995	英国Oxford University Rewley House Association, Japan代表
1994-	株式会社東京デザインセンター 代表取締役社長
1996- 2009	通産省認定Gマーク審査委員
1998-	日本デザインコンサルタント協会代表
2002 - 2012	金沢卯辰山工芸工房講師
2002 - 2004	建築設備総合協会「環境・設備デザイン賞」 審査員
2003 - 2005	アセアンGマーク審査員(アセアン諸国)
2007 - 2009	経産省sozo_com プロモーション戦略ディレクター
2008 - 2014	桑泽学園(東京造形大学)評議員
2009 - 2010	内閣府行政刷新会議事業主分科会 民間仕分人
2010 - 2011	経産省、厚労省、文科省、外務省 省内仕分人
2010 - 2012	愛知県立芸術大学客員教授
2011 -	武蔵野美術大学評議員
2014 -	池田山住環境協議会代表
2017 - 2018	林野庁林政政策議会委員

着すると、荷下ろしをして検品したり、信用状(L/C)を発行してもらうために銀行に走ったり、何もかもが初めてのことばかりで会社には迷惑をかけましたが、自分で一から独学で勉強し、仕事を覚えていく術を身につけることができたと思っています。

夫は文化人類学者として、世界でも有数の未開の地ニュー・ヘブリデス(現バヌアツ)でフィールド調査を行いました。彼が調査している3年の間に一度調査地に滞在したことがあります。おそらく世界のどこでもそうだと思いますが、外からやつて来た「異人」に対して、そこの人々は好奇心が満たされてゐる間は優しい。しかしその異人がその共同体に同化もせずに長期滞在するとなると、拒絶反応が生まれます。それでもよそ者に優しく接してくれたのは、多くは老人か若者でした。

またそこでは、人種や文明度に関係なく、どこにでも奥の深い思考能力の優れた人が必ずいることを知りました。夫が調査に入つた部落は40人程度が暮らす村でしたが、その長は最高齢者ではなく、壮年期のしっかりと男性。夫がフィールド調査の常套句である「あなたたちは文字を持つていません。だから、私が横で観察して、あなたの末裔に伝承すべき文化を残します」と説明すると、彼は「伝統を残すと言つても、我々が死ねば、今の儀式はそのままの形ではない。ここで書き留めたものは、記録にはなるかもしないが、我々の子や孫が同じ儀式を繰り返すわけではない。その時の工夫が加わり伝わっていくのが我々のあり方です」と応えたそうです。人間の、本質を考えぬく力には、文明度による差はないことを知りました。

もうお一人は、千駄ヶ谷のG A ギヤラリーの一川満怡子さんです。一川さんが、世界の建築を知りたいと思ったらまずこの本からと紹介してくださったのが、大学で同じゼミにいた三宅理さんの著書でした。建築インテリアのとば口に立つていた私に、このお二人はごく自然な形で道を拓いてくださったと、心から感謝しています。

そして38歳の時、五反田駅近くにあつた祖父の旧宅の土地活用として、夢だつた「デザインセンター」を構想し、建築設計をマリオ・ベリーニさんと大林組の河津行隆さんにお願いして実現させることができました。この「デザインセンター」は、当時日本の主流であつた地場産業振興のための第三セクターとは違ひ、米国のインテリア・マートを手本としたものです。同種のものとして

後輩のOZONEがありますが、AXISがインダストリアルデザインを軸にし、OZONEが一般消費者を対象とするのに対し、東京デザインセンターは空間デザイナーへの情報提供を中心とする、より米国型のデザインセンターです。

その東京デザインセンターの竣工を前にして、いよいよテナント募集に入るのですが、時はバブル崩壊の真っただ中。1992年3月のお披露目時にオープンしていたショールームはわずか半数という状態でした。そこでとつた経営戦略は、アートから建築デザインへ。そして伽藍方式ではなくバザール方式。まずアートからというのは、クリエイターにとってアートは、インスピレーションを得る最大の要因だからです。



# 船曳 鴻紅

株式会社東京デザインセンター 代表

[www.design-center.co.jp/](http://www.design-center.co.jp/)

## マージナルな視点から 持続可能な社会システムの構築へ